

『映画「ケアニン」上映会&加藤忠相氏講演会』報告書

- 1、 開催日時：令和2年1月25日（土曜日）
- 2、 開催場所：宮崎市民文化ホール イベントホール
- 3、 参加者数：136名
- 4、 テーマ
第1部：映画「ケアニン～あなたでよかった～」上映会
テーマ：「認知症で人生終わりになんて、僕がさせない」
第2部：加藤忠相氏講演会
テーマ：「あおいけあ流介護の世界」



- 5、 内容
第1部：映画「ケアニン～あなたでよかった～」上映会
テーマ：「認知症で人生終わりになんて、僕がさせない」

大森圭（男性・21）という主人公が高校卒業後、これといってやりたいことがなかったなか、漠然とした理由で介護の専門学校へ入学して卒業後、郊外にある小規模介護施設で働くことになり、担当した認知症の利用者との接し方に悩んだりしながら先輩スタッフたちの協力もあり、試行錯誤の中、徐々に関係性を深めていき、介護という仕事に本気で向き合うようになっていくという物語に、主人公が介護士として、人として成長する姿が描かれた映画である。

第2部：加藤忠相氏講演会

テーマ：「あおいけあ流介護の世界」

『何かあったら危ないから』とって、じいちゃん・ばあちゃんを長時間椅子に座らせっぱなしにする、寝かせっぱなしにするのが介護の仕事でしょうか？

目の前のじいちゃん・ばあちゃんに何ができるか考えるのが介護の仕事なはずですよ。いい加減、僕たちは考え方を変えなければいけない。』

というコンセプトを持って今回の講演に臨んでもらったことは、参加したものには気づきの多い講演会でした。

運営されている施設での実践を通して利用者との関わりや国の施策の法律を交えて、介護者（支援者）として求められている自立支援について、わかりやすく話される。

特に利用者の持っているストレングスを如何に発揮させることができるか、施設にマニュアルがないから、スタッフには常に考えてもらうということが仕事であり、その場で相手に取って最善の支援をすることをミッションにしていることを、あおいけあ流介護の世界として講演される。

6、成果

第1部：映画「ケアニン～あなたでよかった～」上映会

テーマ：「認知症で人生終わりになんて、僕がさせない」

「自分は尊い仕事をしている」と胸を張るケアニンが一人でも増えること、そして、社会における介護へのイメージが少しでも前向きに変わるきっかけになること、それが、日本の介護の未来をよりよいものに変えていく原動力になる。

という映画制作のミッションを実感させる映画である。

現在、介護職員の不足の要因には、“3K（きつい、汚い、危険）”というイメージが刷り込まれていることで、なり手がいない現状に、この映画は、そのイメージを変えるために映画という手段によって大いに貢献している作品であるし、介護に従事している方でさえ尊い仕事だと再認識したり、初心を喚起させてくれる映画でもある。

また、介護職以外の方達にも介護のイメージを3Kではなく、生きがいや人として成長する仕事であることに気づく方も多くおられ、上映会の成果は充分果たしたと思える。

第2部：加藤忠相氏講演会

テーマ：「あおいけあ流介護の世界」

- ・「質の高い介護」って何ですか？
- ・介護職は、高齢者から“リスク”を奪って本当によいのですか？
- ・7時間椅子に座らせ続ける“管理”が、介護ですか？
- ・介護は、高齢者を社会資源にし、地域をデザインする仕事
- ・今こそ、僕らの“常識”を変えていこう

というような内容を、実践に裏打ちされた言葉で熱く語る姿勢に参加者は共感を覚えたのではないだろうか。

このことは介護従事者だけに限らず福祉全般の支援者にとって、利用者を一人の人間として接するということが、相手を尊重し、信頼関係を築くことになり、より地域生活での質を高める生活をおくるための支援を、小規模多機能という施設での実践を

通して話して頂くことで、施設の在り方と利用者への支援の在り方を改めて学ぶことになる。

あおいけあでは、支援の最終ゴールを、人間関係としての信頼関係を構築するということを、スタッフ一同共有して、日々利用者に向き合って自立支援を推進しているということで、あたりまえの介護を実践している施設の話をお聴きすることで、勇気と希望と可能性を実感でき、自立支援としての支援の在り方が理解できた講演会であった。



アンケートのコメント

- 心の充電できました。現実逃避、理想と現実のはざままで・・・
- 感動しました、涙々でした。
- 介護の仕事に関わってきた分、色々な想いがこみ上げて来ました。
- この映画を観て、介護のイメージがよくなるとよいと思う。
- 初めての映画に、介護職の仕事がすこしわかり、これからの参考になりました。
- 12月4日から父の介護について考える必要が出てきました。今回の映画で病院に置き去りにすることなく自宅に帰れるように努めたいと思います。
- 看護学生をしていると、相手に“寄り添う”“向き合う”ということはよく言われます。教科書でも必ず出てくる言葉で今回の映画でも多く出ていました。本当の意味での“向き合う”ということは、相手の生活史をしっかりと知って、今の相手が何を思っているのか、を見ることではないかと今回の映画を観て思った。また、自分のケアに疑問を持ってよりよい看護はないかと考える機会を持ちたいと思った。
- “支援”について考えるよい機会になりました。有難うございました。
- 改めて今している仕事を考えさせられました。
- ストーリーがとても自然で現場アルアルの内容が共感しました。また、登場される役者さんの演技も自然体が大変お上手で作った感がなく心にずっと入りました。後方から上映を観ていましたが、映画が伝えたかった見せ場で多くの方が涙していました。皆さん同じ立場、同じ在宅介護や職場で共有する悩みや気持ちがあったのだと思います。素晴らしい作品でした。有難うございます。
- 映画感動しました。人が人を支える意味を改めて考えさせられました。
- 原点回帰
- ケアの意味がたくさん詰まっていた。
- 普段の生活のように介護（ケア）することで認知症の人もありのままでいられるのだと感じました。
- 看取りの場面の言葉で“最後まで生きる”生き抜くことを手伝う、印象的でした。
- 介護職を目指す人は無論ですが、医療職の人にもぜひ見てほしい映画でした。
- 日頃のケアの在り方、考え方について考えさせられました。
- 素晴らしい映画製作、感謝いたします。
- 介護職の素晴らしさを伝えてくれる素敵な映画でした。
- みなさんの表情がとても生き生きしていて、お互いの信頼関係の強さを感じました。
- 介護職 15 年、両親それぞれ看取りをしました。在宅と施設、場所は違いましたが本人達が望む最後が可能な限り迎えられたのかなと思っている者です。しかし現実的には経済的な負担が大きいと実感しています。映画の最後にもありましたが誰もが迎える「老い」と「死」介護を特別な事と考えず小さな時から教育の中にも取り入れあたりまえに受け入れられる世の中になってほしいと思っています。今認知症の母と毎日楽しくボケ合戦をしています。あるがままがいいと思います。
- 上映会を主催した時、じっくり観られなかったため、やっと見ることができました。
- ホームホスピスのケアに似ているところも多く“そうだよ”と感じることが多かったです。来月「ピア」4月に「僕とケアニンとおばあちゃんたちと」を見る予定です。楽しみ

です。

- 今までの「介護の仕事」に対する暗い、忙しい、大変というイメージが全くなくなった。
- 職員は大変そうだが、ではなく、職員さんも毎日楽しいだろうな、と思えるようになった。
- 本当に心に刺さる映画でした。来てよかったです。
- とても面白かったです。たくさんの人におすすりめしたいです。こちらからも沢山広げてほしいです。
- 認知症になっても終わりでない、とても心に残りました。
- その人の人生に寄り添える人になりたいと思います。
- 子供にも見てもらいたいです。
- もっと利用者の方へ向き合おうと思いました。
- 参加できてよかったです、有難うございました。
- 私は認知症の母を介護しています。家では色々大変な出来事を経験しました。今は随分落ち着いています。週4日のサービスを利用しています。今後泊りも考えなくてはと思っています。ケアニンが頑張ってくれていると思うだけで安心して預けそうです。
- 家族の会で毎回話を聞いていただいたり、意見交換しています。あまり介護職の方は参加されないのですが、時々アドバイスをいただいたりしています。認知症の本人だけでなく家族にも寄り添うような今後を期待しています。母にも素晴らしいケアニンがついてくれたらと思います。
- 認知症の人も最後まで、その人の関心があることに目を向けて、接していくことが大切かと思った。
- 高齢者はいつ急変が起きるかわからないので、1日1日を丁寧に接して、その人の人生に寄り添ったケアをしていくことは大事だと思った。
- よい映画でした、管理したり制限するのは、介護ではない、できることをしっかり見守るという言葉が心に残りました。
- ケアマネとしてしっかり寄り添い最期まで生きるお手伝いをしていきます。
- 介護士がもっと自信を持って介護職に就けるよう「ケアニン」色々なところで上映してほしいとおもいました、ありがとうございました。
- 人に寄り添うケアを自分もしていきたいと思いました。
- 現在、作業療法士として仕事をしていますがもっともっと患者さんの人生に寄り添った関わり方をしていきたいと思いました。
- 映画の上映と加藤さんの講演をこのタイミングで経験でき、本当によかったです、ありがとうございました。
- つくりものでない、自然なものがあふれたもので、心が動いて動いて泣いてばかり、人と人、心と心、あたりまえのもの、自分に向けても、大切な人、身近な人のことを考えました。
- とても素晴らしく、今の時代にとっても必要なものを考えさせられ、行動を起こしたい気持ちにさせられました。
- 福祉・医療が生産性を求めすぎて効率化優先で人が失われることを実感、でも諦めず、枠を壁を越えて動くことを思いました。
- 現在、95歳の認知症の母をグループホームで看てもらっています。皆さんとてもやさしく穏やかに過ごさせていただいています。母の特技としている歌をうたう機会を催しのたびにもうけてもらい、母が生き生きした表情をしています。スタッフと信頼関係ができ

ていますので看取りもお願いしています。

- ・一人の青年がケアニンとして育っていく過程をわかりやすく見せていただきました。人として心を寄せていく生き方が素晴らしいと思いました。

- ・映画の中のケアニンの家は、幸せの匂いがします。実際はまだまだ複雑なことも色々あるので、色々な人が関わりを持っていけたらと思います。

- ・とてもいい映画でした、ケアニンの意味はじめて知りました。

- ・もっとたくさんの人達に見てもらいたい。すごくわかりやすくそのままのことなのですが、誰もが老いる、死ぬ、その日までどう生きていくかですね。

- ・認知症になっても、終わりではないという言葉の説明は難しいが、この映画を観たら理解できた。介護の在り方をもう一度考えた。

- ・高齢化社会になる時代、多くの人達に観てほしい作品です。

- ・介護＝助け合いの心が大事ではないでしょうか。

- ・昨日映画を知る、参加して大変良かったです。

- ・本人・家族・介護者、それぞれの思いがよく伝わってきました。一人でも多くの方に観てほしいと思いました。

- ・あたりまえの事をあたりまえに出来る施設が増えていけばよいと思いました。

- ・認知を受け入れることの厳しさを知りました。自分の親が認知になった時、どうするか考えさせられました。

- ・実家の父母も映画のような支援を受けて生活ができるように、私も情報を集めて勉強します。

- ・加藤さんのお話、面白かったです、ありがとうございました。

- ・家族みたくて温かくていいなと思いました。宮崎のように自然があって広い穏やかな場所や街にたくさんの人が来てくれるこんな家があったら幸せだなあと思ったけど、狭くても自然なんてなくてもどこでもできるのですよね。

- ・本当に参加できてよかったです、また明日から頑張れます。

- ・情緒に流れすぎず、質の高いケアの実際を捉えて、よくできた映画だと思いました。私自身、両親共に亡くしていることもあり、息子の光孝さんの気持ちには心揺さぶられました。介護・福祉職の良さ、死の意味を改めて教えてもらいました。

- ・母をグループホームで看取ってもらった事があり、当時の介護職の方のかをが浮かびました。とても感謝しています。

- ・以前から観たかったので念願がかないました。介護の現場をリアルに描いていてあり（特に家族の思い）是非周りの人たちにも観てほしいと思いました。

- ・介護士の役割、何ができるのか、悩んでいた自分と重なりました。今後、利用者さんとどう向き合っていけるか、とても参考になりました。

- ・たくさんの協力や思いの上に支えられ制作されていることが、随所に伝わりました。素晴らしい作品だと思います。もっと沢山の方（我々の介護業界以外）にも観てほしいです。

- ・素晴らしい映画でした、介護職の皆さんしっかり観てほしい、向き合ってもらいたい、一般の皆さん、介護を要する家族の皆さんも観てもらいたい素晴らしい映画でした。第2弾もお願いします。

- ・前回、観ることが出来なかったのが、今回観ることが出来ました。現在、介護の仕事に就く方が少ない中、たくさんの若い世代に観てもらいたい。

- ・都城の施設に看取り部屋があり、小規模にもこんな部屋があるといいなと思いました。

- ・今回、加藤様が講師としてお呼びいただき、有難うございました。
- ・ずっとお会いしたい方で（尊敬できる方、目標にしている方）したので、感謝。
- ・その方の人生に如何に真剣に向き合っているか、自分自身を見つめなおすことが出来ました。有難うございました。
- ・感動、感動です。
- ・涙出ました、ケアニン2観ます。
- ・介護という言葉は好きじゃないんだ、人は生まれて、そして終わりを迎えるこのことは当たり前。当たり前が今はむずかしくなっている。そのあたり前を思い出させて、その大切さを感じました。
- ・学生さんが、受付を手伝ってくださっていて、これからを担う人たちが観てくださるのは頼もしいです。
- ・小規模事業所でケアマネをしています。是非1人でも多くの介護職をはじめ、関わる人々に観てもらいたいと思います。
- ・認知症の症状を解りやすく話してたのでりかいがしやすかった。認知症状（問題行動）に対して上手に伝えることが出来ていた。
- ・ケアニンを企画していただき有難うございました。
- ・これほどの感動を味わった映画は生まれて初めてです。親が私にだけ「物忘れ」症状を訴え、弟達には私が悪者になっています。でもこれもまたこの映画を観たことで救われました。
- ・この企画を準備された方々へお礼申し上げます。もっと多くの方々への認知症とはを広め、私自身も一日一日親との関りを大切にしていきたいと思いました。
- ・セリフの一言一言が心に刺さるように痛くて、一言一言が感動で胸が熱くなり、一言一言が納得できるほど説得力がある期待以上にとっても素晴らしい内容の映画でした。特に最後の「介護て言葉、なくなればいいのに……」ってセリフには大きくなすきました。沢山の人間に観てほしい映画です。
- ・親に電話したくなった。
- ・相手に寄りそう仕事への関心と意欲が高まりました。有難うございました。
- ・認知症は物忘れの病気だと思っていたけど、映画のように膵臓がんの痛みに気づかないこともあるのかと思った。
- ・加藤さんのお話が聞くことが出来て本当によかったです。また、是非聞きたいです。
- ・施設看護の経験あります。アットホームのとても理想的な施設ですね。施設内での「看取り」は、宮崎ではこれからのだんかいです。
- ・こんな体験のできる施設がたくさんになるように！！若いケアニンに大いに見せたいです。
- ・看護職を目指していたけど、介護職もすごくよいと思えるような映画だった。
- ・介護することは特別な事と捉えずにあたり前のことだと思えるような映画だった。
- ・家族にも引き出せないような笑顔なども引き出せ、素敵な仕事だと思った、感動した。
- ・介護職に良いイメージを持ってない人は、たくさんいると思うので、上映会をもっと行ってこの映画が広がってほしいと思いました。
- ・“認知症”のイメージはマイナスなものばかりと思っていたが、この映画を観て「マイナスなイメージを付けているのは私達自身だ」と気づいた。本気で認知症の方やその他の患者さん方と向き合うことで相手のことをよく知れ、お互い支え合って生きていくことが出

来ると改めて感じた。大森圭さんの少しずつ「介護職」に本気で向き合っていく姿、変わっていく姿に感動した。

- ・今回ボランティアとして参加させていただいたのですが、映画を観て“ケアニン”のことがよく知れましたし、お互いが支え合っているんだと改めて感じました。

- ・素晴らしい映画を観て夢に（看護師）向かってまた頑張ろう！と思いました。有難うございました。

- ・看護学生ですが、介護のことについてあまり知らなかったので、小規模な事業所がどのようなケアを行うのか分かって良かった。

- ・加藤さんの講演を聴かせていただいて本当によかった。

- ・徐々に涙を流してしまいました。介護の世界に入って25年、いつの間にか最初の気持ち忘れ去っていたようです。最後の施設長さんの言葉が心にしみていました。本当に「介護」ではないのですよね、「介護する人」「介護される人」ではなく、お互いがそれぞれの特性をいかして、よりそい助け合って生きていくこと、これが「介護」の原点ですね。

- ・今介護現場にいる人、今から目指そうとしている人、そして行政の皆さんに是非観ていただきたい映画でした。

- ・知人より案内のチラシをもらって参加しました。

- ・とてもよかったです！想像以上でした。

- ・日頃から介護の人材不足は、ネガティブな事しか、ニュースにならないからだと思っていました。とてもいい仕事なのだと私も思っていますが若い人にこのことが伝わるといいです。

- ・私は介護とは「心と向き合う」ことだと思っていたのですが、現場は病気だからとか、時間がないからとか、その人を人としてではなく、ただの利用者としてみることばかりで悩むことがよくあります。この映画を観て私の考えは間違っていないと再確認することが出来たので自信を持ってケアニンを続けていきたいと思います。

- ・貴重な企画、今後の自分の働き方を考える大きなきっかけになりました。本当にありがとうございました。